春日若宮様のこと

若宮様は春日大宮の四柱の神様のうち、第三殿の天児屋根命様、第四殿の比売神様の御夫妻の御子神様として、平安時代中期となる長保五（一〇〇三）年に御誕生なされた神様です。その後、春日大宮で五番目の御本社格の神様（五所御子）としてご一緒に御祀りを申しあげておりました。

時を経て長承四（一一三五）年、時の関白・藤原忠通公が中心となり、白河上皇、鳥羽上皇歴代のご要請、お心遣いを賜り、社会の安定と人々の幸せを実現するため、御本社（大宮）の南方一〇〇㍍の御蓋山麓の浄地に新たな御社殿を建立し、遷御、御祀り申しあげたのが若宮社の始まりです。

往時、気候不順による凶作や疫病の蔓延のため苦しんでいる人々の救済に若宮様は絶大な御霊験を発揮され、全ての禍い事を祓い去り、その御加護により好天にして作物豊穣となり、万民ことごとく歓喜し踊ったと記されています。

若宮社御創建の翌年の保延二（一一三六）年、関白藤原忠通公が天下泰平、五穀豊穣、万民和楽を願い、創始された祭儀が「春日若宮おん祭」です。

この祭礼は大和一国を挙げて執り行われる大祭として八八七年間、途絶えることなく毎年奉仕されています。御神前に奉納される数々の神事芸能は国の重要無形民俗文化財に指定され、現在でも一千人に及ぶ人々の参勤奉仕があり、加えて五十頭もの馬が市内を渡るなど、日本を代表する祭礼として十万人を超える参詣者で賑わいます。

生きている日本芸能史と言われ、松の下式を行う表参道の「影向の松」が能舞台の鏡板の源、また御旅所祭の芝舞台が「芝居」の語源ともされています。

このように天下国家の安泰を祈願する神社として創建されましたが、同時に個人の願いをも御聞き届けいただく初めての神社として有名であります。

古来より伊勢の神宮など国家の安泰を祈願する神社は「私幣禁断」とされ、春日大社も同様でありましたが、若宮御本殿前には神楽殿が設けられ、常駐する御巫により個々人それぞれの願い事を託した御巫神楽が奉納されました。このことが大変な人気となり、神楽鈴の音は終日止まず、延々と若宮御社頭に鳴り響いたとのことです。

そして現在、この若宮神楽殿は、日本最古の神楽殿として重要文化財に指定され、舞われていた御巫神楽は今もなお「社伝神楽」として継承され、年中の祭典ではかかさず奉納されています。

此くのごとく絶大な御力を発揮され、萬い崇敬が寄せられてきた若宮様は、今日では人々の生命力を増進させ、正しい知恵を御授けくださる神様として知られる日本を代表する神社であります。

若宮様の御造替は御子神ゆえに大宮と同格の御本社として二十年に一度の式年の制で大宮と同日に執り行われてきました。

しかし、明治政府の管理となってからは、若宮社は御本社格の摂社に位置付けられたために式年とはならず、以降、御修繕のための不定期な形で御造替が行われてきました。明治十六年、大正九・十年、昭和二十五年、昭和三十九年、平成十四年と近現代百二十年余りで五回の御造替奉仕にとどまり、特に前回の平成十四年までには昭和三十九年より三十八年もの長期間に及びました。

このように明治時代以降は、二十年に定まらない不定期な形で若宮様にたいへん申し訳ない失礼な状況が続いておりましたので、今回より二十年に一度の式年造替へと戻してまいります。

第六十次式年造替　若宮本殿遷座祭

令和四年十月二十八日　午後七時執行

本殿遷座祭は新装の若宮御本殿に還御遊ばされる式年造替一連の儀式の中心をなす最重儀であります。

今次式年造替では令和三年四月二十三日に假殿遷座祭が斎行されて以降、皆様方のご協力のもと御殿の御修繕、周辺整備をはじめ御神宝「金鶴及洲浜台」、「銀鶴及磯形」の復元や殿内外の調度品の調製など諸準備を重ね、更に数々の前儀を経てこの日を迎えました。

ご参列の方々には心静かに若宮様の還御をご奉迎ください。

○午後六時　初度ノ案内
○午後六時半　第二度ノ案内

先　参列者参進
若宮神楽殿御廊所定ノ席ニ著ク
○次　正役（若宮神主代）以下祭員奉仕員
参進　祓戸神社所定ノ位置ニ著ク
○次　修　祓
次　正役以下祭員奉仕員　大宮拝礼
次　正役以下祭員奉仕員　移殿ノ座ニ著ク
次　皇族殿下　御参進
○次　摂関家代表同随員　参進
祓戸神社所定ノ座ニ著ク
祓戸神社辺ヘ参着ノ折
第三度ノ案内
○次　摂関家代表同随員　修祓
次　摂関家代表同随員
移殿所定ノ位置ニ著ク
次　惣員一拝
○次　正役　秘文ノ祝詞ヲ奏ス　此間諸員平伏磬折
次　摂関家代表同随員　若宮移殿拝礼
次　摂関家代表同随員　若宮本殿ニ進ミ
細殿ニ着床
○次　滅　燈
次　御切戸ノ御鍵ヲ解ク　此間奏楽
次　御神宝奉出
○次　出　御　此間奏楽
次　殿内御濱床役
移殿殿内ヲ巡検シ御戸ヲ閉ヅ
次　遷　御　此間奏楽
○次　入　御
次　本殿ノ御扉ヲ閉ジ　御鍵ヲ差ス
次　正役以下祭員奉仕員
内院拝舎所定ノ座ニ著ク
次　榎本社社参
次　大幕引キ替ヘ
次　御翠簾奉掲
次　六面神鏡奉遷
次　獅子狛犬ヲ大床ニ奉安
次　四脚机ヲ大床ニ安ク
次　献　燈
次　惣員一拝
次　副役以下　神饌ヲ供ス　此間奏楽
○次　正役　奉幣
○次　正役　祝詞ヲ奏ス　此間諸員平伏磬折
○次　摂関家代表　奉幣
○次　摂関家代表　祝詞ヲ奏ス　此間諸員平伏磬折
皇族殿下　御玉串ヲ奉リテ御拝礼
○次　参列者代表　玉串ヲ奉リテ拝礼
次　御幣ヲ撤ス
次　副役以下　神饌ヲ撤ス　此間奏楽
次　惣員一拝
次　皇族殿下　御退下
次　摂関家代表同随員　退下
次　正役以下祭員奉仕員　退下